

令和 5 年 5 月 20 日現在

機関番号：22401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K11035

研究課題名(和文) 分娩介助実習において学生が指導者への報告を習熟するプロセス

研究課題名(英文) Process for students to become proficient in reporting to instructors in delivery practice

研究代表者

鈴木 幸子 (SUZUKI, SACHIKO)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授

研究者番号：30162944

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：学生と臨床指導者への面談から明らかにした、助産学生の分娩介助実習の報告の習熟プロセスは、「序盤(1～3例)は「質問されながら報告を組み立てる」「カルテ情報など狭い情報収集」だが、中盤(4～7例)になると「産婦の様子、胎児や家族の情報が入る」「根拠をもって行動計画が言える」「心理面への行動計画が入る」、終盤(8～10例)では「自分から報告でき、個別性も入る」であった。それを基に「報告の評価票原案」を作成し、23名の助産学生が1例目と最終事例で評価した。さらに臨床指導者から意見を反映して、報告の方法について2項目、報告の内容について6項目の「助産学生の分娩介助実習の報告の評価票試案」を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

分娩介助実習の安全な遂行と、学生の臨床推論能力の発達を見極め、実習指導の方向性を考慮するために、学生が分娩状況をどうとらえて臨床指導者に報告しているのかを把握することは重要である。分娩は短時間で状況が変化するので、口頭による報告で考え方を確認することはよく行われている。今回、学生の報告の習熟プロセスと指導者の工夫を明らかにし、その評価票試案を作成したことにより、学生と臨床指導者の双方が、臨床推論能力を振り返り課題を見出すことに役立つ。

研究成果の概要(英文)：The process of familiarization of midwifery students' reports in delivery practice, which was clarified from interviews with students and clinical instructors, is "in the early stage (1-3 cases) "composing a report while being questioned" and "collecting narrow information such as medical record information", but in the middle (4-7 cases), "information on the state of the mother, fetus and family" "action plan can be stated with evidence", "action plan for psychological aspects is entered", and in the final stage (8-10 cases), " You can report on your own, and you can have an individual plan." Based on this, a "draft evaluation sheet of the report" was prepared, and 23 midwife students evaluated the first and final cases. In addition, based on the opinions of clinical instructors, we prepared a "draft evaluation sheet for midwifery students' reports on delivery practice" with two items on the reporting method and six items on the content of the report.

研究分野：助産学教育

キーワード：分娩介助実習 臨床指導者への報告 報告の習熟プロセス 評価票 助産学生

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

「分娩介助実習において学生が指導者への報告を習熟するプロセス」基盤研究(C) 研究期間 2019～2022 番号 19K11035 研究代表者：鈴木幸子(埼玉県立大学保健医療福祉学部 教授)

1. 研究開始当初の背景

少子化、産婦の高齢化、産婦の権利の擁護等の理由から助産実習での分娩介助の機会は貴重である。学生は分娩進行に伴い、自分の判断や今までの援助の評価と今後の助産計画を報告し、臨床指導者と相談しながら実習を進めている。通常の看護の実習では刻々と変化する事例を受け持たないことが多く、頻繁な報告や相談を経験しない。しかし、助産実習では短時間のうちに進行する分娩経過に沿って必要な報告や実践が求められる。しかし、助産学生の産婦受け持ち中の「報告」の能力については取り上げられていない。さらに助産学生を指導する臨床指導者も学生の「報告」によって、分娩経過の判断の妥当性や実施するケアの根拠を確認していることから「報告」は分娩介助実習の安全と効果的学習経験のために重要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、助産学生の分娩介助実習における報告の習熟プロセスを明らかにすることにより、実習中の指導者の関わりにおける工夫や実習中の報告の習熟に役立つ方策として報告の評価票を作成することである。

3. 研究の方法

1) 2019～2020 年度

実習終了後に同意を得た助産学生 6 名と実習指導者 21 名に半構成的面接調査を実施し、会話のメモをコード化し意味内容の同質性によってカテゴリ化を行った。学生 6 名分の分娩介助実習記録のうち「全体像と助産の方向性」の用紙をコピーし収集した。

2) 2021～2022 年度

- ①報告の評価票原案作成
- ②報告の評価票試案のプレテスト実施(学生 23 名に対して臨床での分娩介助 1 例目と最終の 2 回調査) 試案への意見収集
- ③報告の評価票への意見聴取(臨床指導者 5 名に対してグループインタビュー実施)と評価票原案の修正(評価票試案の作成)
- ④学生の初期計画にみる全体像と課題をとらえる力の評価(データ収集済み)

2019 年度(コロナ禍前)の実習記録から、同意を得た 6 名の「全体像」の記録用紙をコピーし、「情報だけでなく、アセスメントが伝えられる」「産婦の観察など多様な複数の情報からの判断が伝えられる」「現在の分娩進行状況だけでなく、今後の予測が伝えられる」「判断に基づく行動計画が伝えられる」「一般的でなく産婦の背景や志向を踏まえた内容を伝えられる」「胎児情報に基づくアセスメントや行動計画を伝えられる」に相当する記録内容がどの程度含まれているかを判定した。判定は 1:まったく含まれていない～5:十分含まれているまでの 5 段階で評価した。

本研究は研究者所属の倫理委員会の承認を受けて実施した。

4. 研究成果

1) 2019～2020 年度

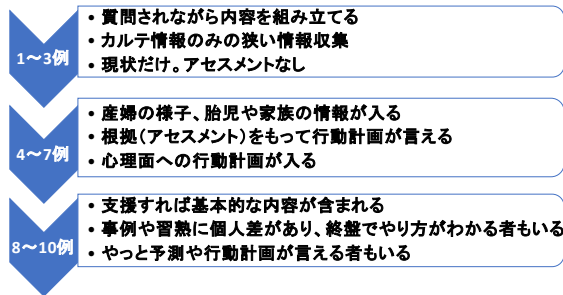
「報告」の習熟プロセスは、序盤(1～3 例)は「質問されながら報告を組み立てる」「カルテなど狭い情報収集」「現状だけ、アセスメントなし」だが、中盤(4～7 例)になると「産婦の様子、胎児や家族の情報が入る」「根拠をもって行動計画が言える」「心理面の行動計画が入る」、終盤(8～10 例)では「個人差があり、終盤で報告の方法がわかる者もいる」「自分から報告でき、個別性も入りほぼ安心して聞ける」という習熟がみられた。学生は「報告のひな型を作る」「笑顔で挨拶、積極的な態度や片付けを心がける」指導者は「報告を促す」「学生が居心地がよい様にする」「多くのことを課さない」等の工夫を行っていた。

習熟には個人差があるが、学生と指導者双方が良い実習環境を作り、初めから多くを求めないことにより徐々に習熟すると考えられた。

2) 2021～2022 年度

①報告の評価票試案作成

報告内容の習熟プロセス



学生と臨床指導者のインタビューをもとに報告の習熟プロセスを上記のように把握し、それに基づき、評価票原案を作成した。

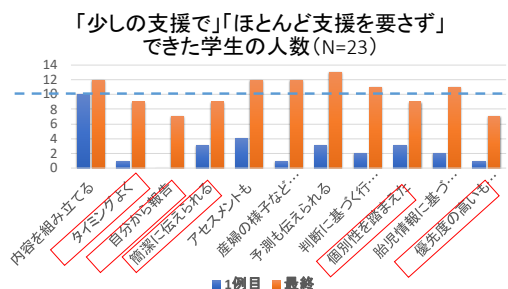
報告の評価票原案

方法	1 報告内容を自分で組み立てて報告できる
	2 適時にタイミングよく報告できる
	3 促されなくても自分から報告できる
	4 簡潔に短時間で報告できる
内容	5 情報だけでなく、アセスメントが伝えられる
	6 産婦の観察など多様な複数の情報からの判断が伝えられる
	7 現在の分娩進行状況だけでなく、今後の予測が伝えられる
	8 判断に基づく行動計画が伝えられる
	9 一般的でなく産婦の背景や志向を踏まえた内容を伝えられる
	10 胎児情報に基づくアセスメントや行動計画を伝えられる
	11 優先度の高い内容から伝えられる

方法4項目、内容7項目の合計11項目。5段階リッカートタイプ（1：支援を受けても全くできなかった～5：ほとんど支援を要さずできた）の評価票原案を作成した。

②報告の評価票原案のプレテスト実施（学生で、23名に対して臨床での分娩介助1例目と最終の2回調査）

23名の結果についてグラフに示す。1例目よりも最終事例のほうがいずれの項目も「少しの支援で」「ほとんど支援を要さず」できた人数が多いが、とくに「適時にタイミングよく報告できる」「促されなくても自分から報告できる」「簡潔に短時間で伝えられる」「一般的でなく産婦の個別性を踏まえた内容を伝えられる」「優先度の高い内容から順に伝えられる」については、最



終事例でもできた人数が少ない傾向があった。

③報告の評価票への意見聴取（臨床指導者5名に対してグループインタビュー実施）

実習指導者からの意見

- 初期計画の報告は型紙やyoutubeを参考に組み立てていた。
- 「タイミングよく」「簡潔」「優先順位」かなり難しい。何年もかかる
- 「報告」よりもまず、「相談できる」ことが大事
- 困っていることは相談してほしい
- 学生だからこそ、見える情報を拾ってきてほしい
- はじめの行動計画だけでなく、「修正」をしてほしい
- 何のために報告したいのか？報告の目的は何？
- SBARを意識して

学生の報告の内容は「型紙」などの同一の形式を用いているためか、内容項目が画一的になりやすかった。学生のプレテストの結果と同じく、臨床指導者も「タイミングよく」「簡潔に」「優先順位」での報告はかなり難しいと考えていた。このため、この項目は学生の実習に対する評価としては不適切と考えられる。学生だからこそ見える情報は長時間付き添えることを実習では大事にしているため、産婦の個別性の高い情報が把握できる機会があると考えられる。産婦の個別性に関する情報はプレテストでは報告が難しい項目であったが、必要と考え、評価票に含めることにした。

以上の意見を踏まえて評価表試案は下記のとおりとした。

報告の評価表試案

方法	1 報告内容を自分で組み立てて報告できる
	2 促されなくても自分から相談できる
内容	3 情報だけでなく、アセスメントが伝えられる
	4 産婦の観察など多様な複数の情報が伝えられる
	5 現在の分娩進行状況だけでなく、今後の予測が伝えられる
	6 判断に基づく行動計画が修正できる
	7 一般的でなく産婦の個別性を踏まえた内容を伝えられる
	8 胎児情報に基づくアセスメントや行動計画を伝えられる

④学生の初期計画にみる全体像と課題をとらえる力の評価（2019年度にデータ収集済み）

その結果6名それぞれの1例目から8～10例目（最終事例）までの変化を折れ線グラフで見るとおよそ3つの類型に分類できた。

<例数に従ってバランスよく記録内容が徐々に含まれるようになるタイプ>

<産婦の観察による情報や個別性のある情報、計画が最後まで少ないタイプ>

<例数によるばらつきが大きいタイプ>

把握した傾向

- ・ 行動計画については「全体像と助産の方向性」を記載する用紙のため、アセスメントが中心になりどうしても少なくなる傾向があった。
- ・ カルテ情報以外の産婦の観察によって得られる情報については B, E, F の学生は前例を通じて少ない傾向があり、情報収集の取捨選択には個人差があった。
- ・ 胎児情報に基づくアセスメントと行動計画が少ない傾向にあった。
- ・ 行動計画は記載が不十分だったが、パターン化（誘発分娩、無痛分娩等の標準的な助産計画）が多く、個別性が反映されていなかった。

報告の習熟プロセスとの関連

報告の習熟プロセスは、臨床指導者対象の2000年度の調査によると、「序盤（1～3例）は「質問されながら報告を組み立てる」「カルテ情報など狭い情報収集」「現状だけ、アセスメントなし」だが、中盤（4～7例）になると「産婦の様子、胎児や家族の情報が入る」「根拠（アセスメント）をもって行動計画が言える」「心理面への行動計画が入る」、終盤（8～10例）では「事例や習熟に個人差があり、終盤で報告の方法がわかる者もいる」「自分から報告でき、個別性も入りほぼ安心して聞ける」というプロセスである。

これと比較すると、4～7例目の中盤になっても「産婦の様子、胎児や家族の情報」が全体像の用紙に取り込まれない学生は臨床指導者への報告内容や行動計画にも産婦の様子等を総合的に判断することができないことが想定される。

行動計画については、用紙がアセスメント中心の記述になりがちのため限界があるが、収集した情報や根拠に基づく行動計画というよりも、標準的な助産計画が主体で、産婦の様子や個別性が反映されていない傾向があった。このことから、実習の中盤でカルテ情報や軟産道や陣痛の情報以外の産婦の表情、言動などの情報、疲労感、家族の情報などを取り込めていない学生は、十分な個別性のあるアセスメントができず、個別性のある行動計画ができない可能性があり、個人差が大きいことが「全体像」の記録用紙からも伺えた。

3. 本研究で得られた分娩実習教育への示唆

分娩介助実習では思考過程と、実際の援助の両方の習熟が必要となる。逐次の報告や相談は、安全な実習と思考過程の訓練のために必須であるが、例数を重ねるごとに報告の方法や内容が充実してくる傾向はあるが、学生によって個人差が大きく、中盤（4～7例目）になっても産婦の様子や、背景などの個別性の高い情報とそれに基づくアセスメントや行動計画が報告に含まれず、最後までその傾向が続く学生もいた。今回、報告の評価の視点について評価票を作成して明

らかにした。指導者は「報告を促す」「学生が居心地がよい様にする」「多くのことを課さない」等の工夫を行っていたが、評価票もこのような習熟の遅い学生が課題に気づき、情報収集を広げ、個別性を考慮した行動計画が可能となることを促進するものである。

　　今後は評価票の改善と、多忙な助産実習においていかに簡便な活用方法を提案していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木幸子、千葉真希子
2. 発表標題 分娩介助実習における「報告」の習熟プロセスと習熟に向けた学生と指導者が行っている工夫
3. 学会等名 第61回日本母性衛生学会学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------